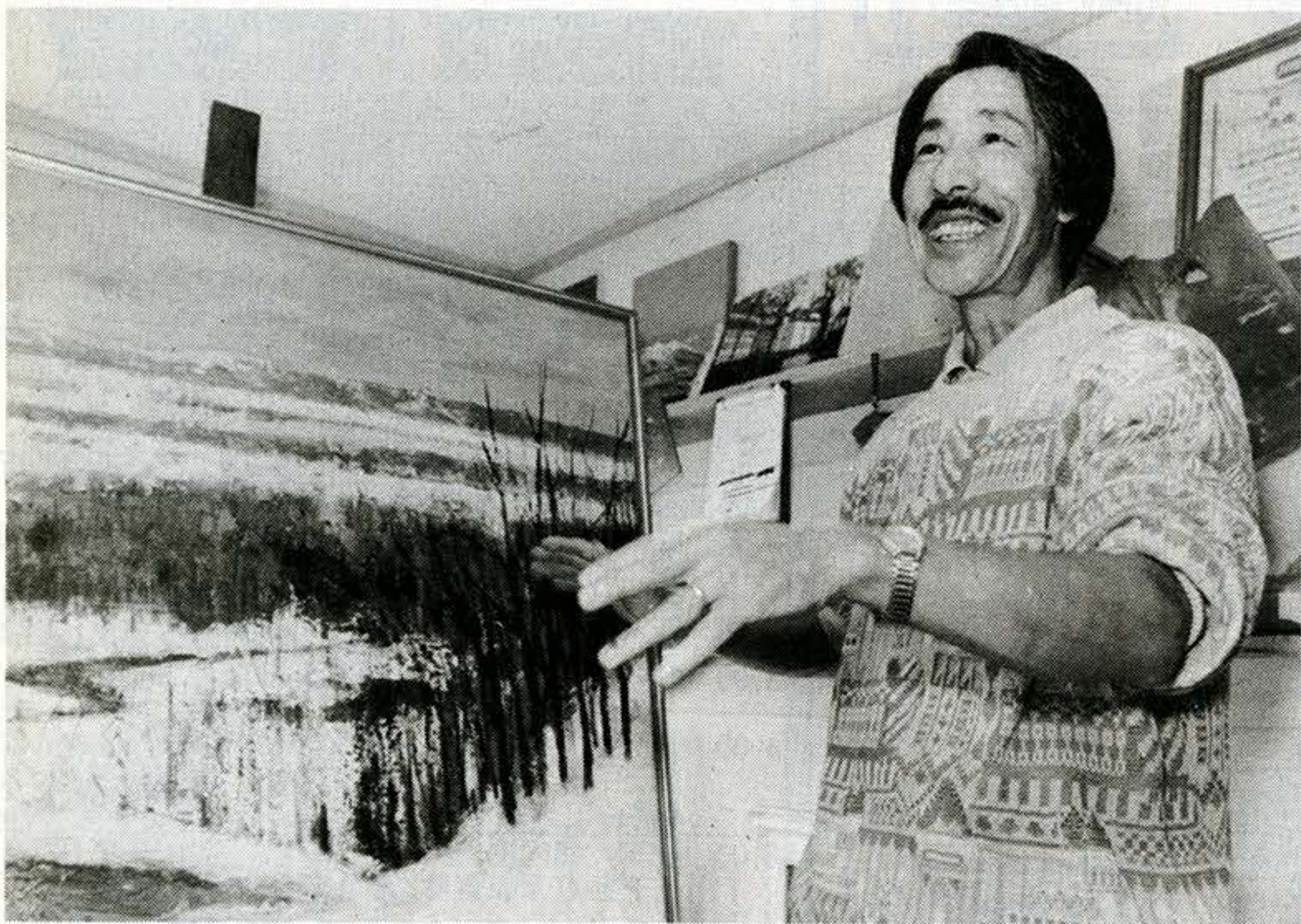


何度も通う中から見過ごされがちないい風景をとらえていきたいーと高橋さん（アトリエで今年道展入選の「湿原の冬」を前に）



釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

■上■

なった。細岡展望台へ続く曲がりくねった上り坂、その黒々とした道の遠景に一面の雪の湿原が広がり、阿寒連山がうっすら浮かぶ。

「人が何気なく見過ごす風景。そこにひそむその時々、の美しさを画家の目でとらえたい」。見つめる対象を釧路湿原に据えて五年になる。

釧路市生まれ。子供の頃から好きだった絵を本格的に始めたのは、三十八歳になってから。「そろそろ人生で違ったことをやってみよう」。看板業を営むかたわら油絵の本を買ひ込み、絵の具の色一本から技法などを独学。キャンバスに向かった。

地元の公募展・釧美展初入選は、昭和五十五年。同五十八年釧路市長賞受賞、六十年道展に初入選し、今年で五回の入選を

数える。平成三年釧美展会員に推挙され、釧路美術協会会員。一時は故藤

取り組む。昨年は大作もそろえて初の本格的な個展を市内の画廊で開くなど精力的な創作活動を続けている。

何度も足運びイメージを

テーマに据える釧路湿原へは、時間のある限り何度も足を運ぶ。大半が細岡展望台周辺だ。スケッチブックや一眼レフカメラを携え、その時々感じたモチーフをスケッチ。アトリエで繰り返し描き、そのイメージを十分に膨らませる。

今回の芸術賞受賞に「本当に驚いています」と笑顔を見せる高橋さん。「これからも湿原との『出会い』を大切に、好きな風景を描きたい。佐々木栄松さんでしたか。見たままではなく、見えるように描く」という言葉が好き。この気持ちをお忘れなさいたい。来春には、小品による個展を予定、新たな公募展への挑戦も思い描いている。

絵画

本格的な油絵は38歳から

釧路湿原を描いた一〇〇号の大作「湿原の冬」が今年道展の入選作と

高橋和彦さん（五二）

（釧路市鶴野五八、釧路美術協会会員）

湿原との出会い大切に 時々の美しさ画家の目で

村正豪氏主宰の彩美にも所属した。

アトリエは、自宅前にある看板業の仕事場を使用。小品は自宅居間で